

揺らぐ安全神話 柏崎刈羽原発

「責任を感じている。柏崎に原発を呼んできたのは父ですし」。東京電力柏崎刈羽原発が被災した中越沖地震の発生から十日後の七月二十六日。元首相田中角栄の長女で衆院議員の真紀子(みき)は新潟市のホテルで、参院選を戦う民主党候補の応援演説の中でこう語った。

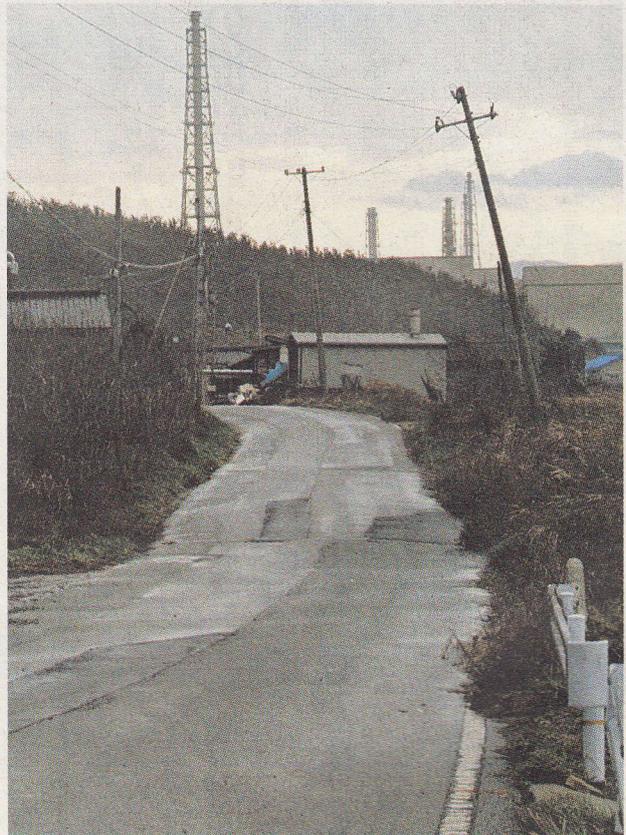
同原発の建設予定地をめぐり土地売却益約四億円が届けられた元首相邸。主の田中は原発誘致にどうかわわっていたのか。

地元が誘致を決議した一九六九年当時、自民党幹事長として抜群の政治力を示

ぜな未開の砂丘地に

< 4 >

柏崎市大湊の道路の先に見える柏崎刈羽原発。かつては砂丘地を貫き、人々が往来した道路は今も原発によって行き止まりになっている—13日



電源三法

元首相が「生みの親」

誘致は理研人脈を発端に

ら約五十年間勤務した。業原産会議副会長も歴任した界の生き字引的存在だ。五松根宗一(故人)だ。五十四年前にあった原子力に関する国の審議会答申内容をよどみなく語る森だが、田中が表立って誘致に動いた記憶はないという。

柏崎刈羽原発建設に携わったばかりの小林治助(故人)に原産誘致を勧めた人は松根さんの後にも先にも

物である。松根は愛媛県宇和島市出身。日本興業銀行に勤めた後、理研に入った。電力業界でつくる電気事業連合会副会長にも就いた。「電力中は「松根さん。娘(真紀子)をもらってくれる人が決まって本当に良かった」

「ない」と森。屈指のエネルギー事情通だった。森は、松根と田中が同席した場面に一度だけ立ち会ったことを覚えている。田中「松根さん。娘(真紀子)をもらってくれる人が決まって本当に良かった」

と喜んでいただろう。だが、原子力の話はなかった。森は「松根さんは「今日、角栄さんがこんなことを言っていた」とよく私に話してくれた。二人は非常に親しかった。自宅も近かった」と振り返り、原発誘致に関する推測を口にした。「どちらかというと松根さんが勧め、田中さんが話に乗ったのではないか」

田中の地元筆頭秘書を務めた国家老と呼ばれた本間幸一(ふち)は松根との面識はないと言った。「うち(田中)は理研とのつながりはあった。

総辞職の半年前だった。柏崎刈羽原発誘致に限っては具体的な動きが見えない田中。だが、首相時代の七四年六月、原発立地自治体に多額の交付金を配分する電源三法を「生みの親」として成立させ、原発推進の表舞台に立つ。田中内閣総辞職の半年前だった。電源三法の発案者は柏崎市長・小林とされる。六九年の誘致決議を機に原発建設への行程は順調に進むかに見えた。だが、大きな試験が小林を待ち受けていた。(文中敬称略)

していただけに、さまざまり、同原発所長も務めた宅な憶測を呼んできた。間正夫(ち)は推測する。「(誘致の経緯を記した)「どこまで立ち入っていたのかははっきりしない。資料で田中さんの名前を見れば外交に努めていたのは分たことはない。政治問題にかるが」。原子力産業の発展を目指して五六年に設立された日本原子力産業会議現日本原子力産業協会)の元専務理事・森一久(いち)は考え込んだ。森は原産会議に設立時か一人挙げた。森が長年仕えただけ、森は田中と原発との接点と考えられる人物を

親密な付き合い

参院選の演説で父角栄の誘致関与を示唆した真紀子。しかし、発言内容を確認すると「周辺の人から伝え聞いただけ。父はエネルギー政策は重要とよく言っていたが、父から原発の話聞いたこともないし、個別に話したこともない」と答えた。

総辞職の半年前

柏崎刈羽原発誘致に限っては具体的な動きが見えない田中。だが、首相時代の七四年六月、原発立地自治体に多額の交付金を配分する電源三法を「生みの親」として成立させ、原発推進の表舞台に立つ。田中内閣総辞職の半年前だった。電源三法の発案者は柏崎市長・小林とされる。六九年の誘致決議を機に原発建設への行程は順調に進むかに見えた。だが、大きな試験が小林を待ち受けていた。(文中敬称略)